

NPO法人



2009年 5月25日
第 2号

Jomon Shiba



特定非営利活動法人

縄文柴犬研究センター

NPO法人



Jomon Shiba

第 2号

もくじ

もくじ	1
信頼関係 ☆縄文柴犬研究センター 理事長・新美治一(名古屋経済大学法学部・大学院法学研究科教員)	2
シバとコロ(2) ☆JSRC 理事・根深 誠(文筆家・釣り師・元登山家)	3
縄文柴犬の個体差と生活環境の変化 ☆宮城県・阿部伸樹	6
レポート「動物園の森林オオカミのこと・アイヌ民族資料館のこと」 ☆北海道・橘 宏	8
お便りコーナー ☆吉方さん	10
☆前田さん ☆金 さん	11
☆杉田さん ☆中山さん ☆神沢さん	12
☆竹村さん・マロ新聞(その2)	13
☆杉村さん ☆宮田さん	14
☆ケンタ通信・山下さん	15
思い出の犬たちー(3)ー ☆柴犬研究所・五味	16
縄文柴犬の見方-2 体軀・胸や四肢について(その1) ☆五味靖嘉	18
理事会開催のお知らせ ☆JSRC 理事長・新美治一	20
会誌の愛称について ☆JSRC事務局長・樫尾 豊	20
3月末現在の中間会計報告 ☆JSRC 会計・石川辰雄	20
新企画 JoeとMon (4こまマンガ)作:ぼよよ〜んオヤジ 文:風(フウ)	裏表紙・内側
広告掲載:「吉方内科医院」、「秋田清酒株式会社」	表紙・裏側
:「サン獣医科」	9
:「イズミヤ印刷」	裏表紙・表側

宛名表記の確認をお願いします。

特定非営利活動法人 縄文柴犬研究センター

会事務所

郵便振替口座 02280-2-106951

秋田銀行 横手西支店 343-309224

〒 014-0073 秋田県大仙市内小友字堂ノ前119番地5

TEL 0187-68-2976

<http://www.sibainu-k.jp>

jsrc.jimukyoku@gmail.com

信頼関係

縄文柴犬研究センター 理事長 新美 治一

(名古屋経済大学法学部・大学院法学研究科教員)

生きていくうえで最も重要なことの一つに「人と人との関係」がある。人は、小説の世界であれば別であるが、一人では生きていくことはできない。人間という文字そのものが、複数の人を意味している。これと同じ程度でないものの、人と犬との関係も重要なことだと思う。

そのなかで何よりも重要なのは、信頼関係であろう。

いま、小生の家族と共生しているのは、縄文柴犬の「林王丸」である。通称、リン。小生とリンとの関係は、リンの側からは、<ほぼ100%信頼して良い人>と思われていると確信している。リンと散歩する道は、阿久比(アグイ)川の堤防である。およそ3キロの行程である。車はもちろん人が通ることのない道なので、通常、ひもから放しての散歩であるが、途中で2カ所、一般道と交差する。そこでは、綱に結ぶことになる。リンは、一般道との交差点に近づく手前50メートル位で、小生のところに近づきお座りをする。交差点をすぎれば、また、放してくれることを知っているからかもしれない。それとも、5年くらい前に、一度勝手に走って行ってしまったとき、きつく叱責したのを覚えているからかもしれない。理由はともかく、この約束だけは、きちんと守っている。

先日、前足の一部の毛が薄くなる症状が現れ、獣

左から リン・ベニ・フウ (名古屋の自宅にて)



医さんに初めて訪問することになった。獣医さんが皮膚病か否かの判断のために毛の一部を抜く段になると、リンは彼に威嚇を始めたのである。ところが、小生の「よし・よし、心配はしなくていいの!」の一言で、検診台で静かに処置を待ち、加えて、腹部を診ておきましょう、ということで仰向けになる必要が生じた。これも、指示通りに静かに体勢をつくり、獣医さんの診察をうけたのである。獣医さんもこんな犬には会ったことがない、とビックリ。ご主人をよほど信頼しているのでしょう、の一言に、リンをほめてやりたくなった次第である。

小生が、仕事に出かけるときは、決して「呼びかける」ことはしないのであるが、庭で仕事でも様子と察すれば、それは、もう大騒ぎをする。仕事の際は、「ダメ」とわきまえ、わがままをしていいと判断すれば、身体全体で表現する。仕事の際はダメでも他の時には大丈夫、というこれも信頼関係の表れでしょう。

人間同士の関係は、「金銭」が介在するとき複雑になり、ときには、信頼関係が崩れかねない状況がうまれる。誠に残念ではあるが、金銭を媒介にしないと多くの人間関係は成立しない。そうであれば、ますます、信頼関係が大事になるのに、と思う。犬と共生している人であれば、小生とリンの間のような関係は、築かれていると思う。「人と犬の関係」は、「人と人との関係」と比べることはまったくできないが、双方の信頼関係が「相互関係」の基礎であることには変りない。リンと一緒に生活することによって、いろいろ教えられることがあり、和むことがある。幸せだと思う。(2009/04/27記)



上: 福島の「新美研究室」で暮らすベニとフウ
下: 研究室前で。 夫婦犬で子育て!

シバとコロ (2)

根深 誠 (文筆家、釣り師、元登山家)

わが家で生まれて隣家に貰われていった犬はチャロと呼ばれていた。チャロはほんとうにかわいそうだった。虐待されて悲鳴を上げているのに隣家の住人は益々怒り狂って虐待を繰り返した。チャロの悲痛な叫びが深夜、わが家に聞こえてくるので精神衛生上、甚だよろしくない。気の毒でしのびないのだ。拳句の果て、恐ろしいことが起こった。チャロの叫びが近所迷惑になり、近隣の人までが「うるさい」と叫んで、チャロにものを放り投げたりするのだ。狂気の沙汰である。

私は逆上して隣家の住人に罵詈雑言を浴びせた。もちろん、相手に聞こえないように内々にである。馬鹿だの阿呆だの、それ以上に露骨に差別用語を使つての罵倒だからここには掲げられない。私が悪者になってしまう。世間とはそういうもののようで、私は感情を剥き出しにした拙文を書いて、実情を知らない読者から非難された苦々しい経験が多々ある。誤解されることにもなるので黙るに越したことはない。

隣家の住人は、その後、住居を売り払い、近隣に行き先を知らせることなく突然、引っ越していった。日常生活で挨拶を交わしていた近隣の人たちに移転先を知らせないのは非常識ではないかと思われる。非常識といえば、こちらが挨拶をしても、どういう事情がわからないが、隣家の夫は私を無視することが常だった。夫人のほうは外面だけはすこぶるいい。

隣家の住人がいなくなったので、私としてもいくぶん安心してこの稿を書くことができる。隣家に依然として住んでいるのであれば、いくらなんでも気後れして書きづらいのが人情というものだろう。

チャロを虐待した隣家の夫妻は互いに「パッパー」「マンマー」と呼び合っていた。「パッパー、コーヒー入ったわよ」「なーに、マンマー」といった具合で、それがわが家に聞こえてくるのだから、私としては鳥肌が立つようで気持ちが悪い。

こうした仲良しのパパとママの夫婦は、欧米ナイズされた現在の日本の社会では少なくないのかもしれない。隣家のパパとママはコーヒーカップを片手に、片手で手をつなぎ合つて安普請な家ぐるぐる歩き回っていることがあった。二人で散歩を愉しんでいるつもりなのだろう。私にしてみれば、これも気持ちが悪い。

前回述べたように、パパとママの家の裏側がわが家の庭に面していて、1.5メートルほどの敷地をへだててわが家の庭に接しているのである。境界には塀も



人気者のシバは散歩中に子どもたちと記念撮影。二歳のとき。

柵もない。わが家の庭の境界のちかくにあるカラマツの木の間もとにコロの小舎がある。

コロの死やチャロの虐待については以前、私は本に書いたことがあるので、ここでは繰り返さない。参考までに述べるとコロの死については『釣り浮雲』(つり人社)、チャロについては『ゴンボホリの系譜』(無明舎)に収録されてある。いずれにしてもチャロがいなくなると、パパとママは裏側の自分たちの敷地に除草剤を撒き散らすようになった。コロの死について、毒物を食べたのではないかという獣医の見解から、もしかしたらこの除草剤が原因ではなかったかと私は疑念を抱いているのである。

コロが死んで七年、チャロがいなくなって九年になる。チャロは保健所に押しやられ、処分されそうになったところをわが家の二男が救出し、当時交際していた大学生の娘さんの家庭に貰われていったのだ。チャロももう亡くなったかもしれない。野良犬だったコロもわが家に飼育されて幸せだったろうし、チャロも、その後、この稿では割愛したが、紆余曲折ののちに幸せに飼育されたのである。

コロがなくなった当時、東京で大学生活を送っていた長男が、その思い出に書いたメモを紹介しよう。文章を書き残そうとしたのかもしれないが、メモは作品化されることはなかった。

コロの思い出メモ

コロは股間をなめる癖があった。股間を地面になすりつける癖もあった。病気のせいである人が向けてくることもあった。コロは道路の端に寄りたがった。雪やぶの中につっこむのが好きだった。雪玉で遊んでもらうのが好きだった。腹が減った時、散歩に行きたい時、雨の時だけ吠えた。水が大嫌いだった。水洗いしようとするときとすると暴れた。新聞屋、郵便局員からエサをもらったりしていた。持続力がなく瞬発力があつた。メデイアインまで往復するとバテバテだった。一人で散歩するのは退屈だったが、コロと一緒に割と楽しかった。今、思えばもつとコロと散歩しておけばよかった。夏の暑い日は仰向けになって寝ていた。コロはよく、夏になると腹を撫でられるのが好きだった。毛の脇にいつも毛の塊ができていた。耳の脇にいつも毛の塊ができていた。最初は他のいぬとすれ違ってもあまり吠えることはなかった。散歩で他のいぬがやってくることもあまり吠えることはなかった。近所に他のいぬがやってくることもあまり吠えることはなかった。オヤジや弟の慎は雨が降るとコロを玄関にすぐ入れた。母はいやがった。俺はどちらでもなかった。プリンが好きだった。ヨーグルトは嫌いだった。牛乳は普通であつた。あまり食べさせなかったがペットフードは大好き。人間の子供のようになつた。慎が岩木川の河原に連れて行くとしたが。庭で乗るのをいやがった。庭で引張るほど、妊婦してた時も切らなかつた。坂道で引張るほど、いっつも先頭を切らなかつた。坂道で引張るほど、ほとんどの人には吠えたような？ たまたまコロの虫の居所が悪かったが、団地かもしれない。



庭の片隅に建てられたコロの墓。

私はこの稿をネパールの首都カトマンズで書いている。毎朝、散歩に出かけるのだが、野良犬が目につく。路上のゴミを漁り、栄養状態が劣悪なせいか、痩せて毛が抜け落ちて動けなくなっているのもいる。生みっぱなしにされた仔犬も、餌を拾えなくなれば、そのうち野垂れ死にするだろうことを考えると気が重くなる。

それにくらべるとコロもチャロも、そして現在飼っているシバもマシではないだろうかと思ったりする。シバはいままでのところ悲劇的な体験をしたこともなくわがままいっぱい育てられているようだ。家族によれば、私を散歩係として格下に見てるとのこと、そう言われてみると、たしかに態度がでかい。散歩の時間だ、腹が減ってきた、と私を呼びつけるような啼き声を出すのである。

しかし、それもいいではないか。お座りはできるし、お手も伏せも、待てと言えば止まって主人の顔を見上げる。難点は散歩中、先頭切って突進するよ

うに歩いたり、向こうから犬が来ると身を伏せて攻撃態勢をとったり、あちこちにマーキングすることである。あるとき知人と立ち話をしていたら、その人の足にマーキングした。わがままなぶんだけ私をなめて、そうした癖はなかなか直らない。もう少しお利口にならないものかと案じている。

犬はその社会や家庭の幸福度の目安のようでもある。不幸な社会や家庭の犬は不幸だろうし、その逆も成り立つのではないだろうか。もしそうだとすれば犬を幸せに育てることは明るい社会の形成にもつながるような気がする。犬を人間に置き換えて考えてみればいい。一目瞭然である。

ところで、幸せとはどういうことなのだろうか。幸せな社会、幸せな家庭。犬と散歩するようになってから、そのことを考えさせられるようになったのは、幸せに反するような風通しの悪いことさらに散歩中出くわすことがあるからだ。 (続く)

2009.04

コンテ

